

【原 著】

地域との連携に基づく食育プログラムの開発研究
—小学校「総合的な学習の時間」における単元開発を事例として—

山田 風紗 山田 真珠 桑原 敏典

Developing a food education program focusing on cooperation with a local community
On the basis of making a lesson plan for the integrated learning of an elementary school

Nagisa YAMADA, Shinju YAMADA, Toshinori KUWABARA

2019

岡山大学教師教育開発センター紀要 第9号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.9, March 2019

原 著

地域との連携に基づく食育プログラムの開発研究 —小学校「総合的な学習の時間」における単元開発を事例として—

山田 風紗※1 山田 真珠※1 桑原 敏典※2

本研究は、地域との連携を重視し、連携の成果を取り入れながら小学校の「総合的な学習の時間」における食育のプログラム開発を行おうとするものである。平成17年に食育基本法が制定され、平成20年改訂の学習指導要領総則においては、学校における食育の推進が盛り込まれた。さらには、関連する各教科等でも食育に関する記述が充実するなど、食育の取り組みは活発化していると言える。食育は、その内容が広範囲に及ぶことから教科の学習としては十分に扱いきれず、横断的・総合的に取り扱う必要がある。本研究では、平成29年に改訂された学習指導要領の「総合的な学習の時間」の趣旨をふまえて、小学校において食育を効果的に展開するための単元開発に取り組んだ。単元開発にあたっては地域との連携を重視し、教材研究の中で取り組んだフィールドワークの成果を教材化し、地域とのつながりを実感できるプログラムを目指した。

キーワード：小学校，総合的な学習の時間，食育，フィールドワーク，地域社会

※1 岡山大学大学院教育学研究科大学院生

※2 岡山大学大学院教育学研究科

I はじめに一問題の所在一

本研究は、小学校総合的な学習の時間における食育のプログラム開発を行うものである。近年、社会環境の変化から子どもの健康に関する問題が深刻化している。食生活の乱れが著しく、偏食や好き嫌い、朝食の欠食などの問題は後を絶たない¹⁾。こうした食生活の乱れは、肥満や痩身傾向などを生み、生活習慣病のリスク増加に繋がると考えられている²⁾。

このような状況の中、平成17年に、様々な経験を通じて、「食」に関する知識と「食」を選択し、健全な食生活を実践できる人間を育てるために食育基本法を、平成18年には食育推進基本計画が制定され、日本全国で食育の促進、学校給食における地産地消が行われるようになった。現在は、第三次食育推進基本計画のもと、若い世代や多様な暮らしに対応した食育の推進等、5つの重点課題が設定されている。

その動きに対応するように、学校においても、子どもたちが食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身に付けることができるよう、積極的に食育に取り組んでいくことが重要であると考えられた³⁾。平成20年改訂の学習指導要領総則において、学校における食育の推進が盛り込まれたほか、関連する各教科等でも食育に関する記述が充実するなどした。その傾向は、平成29年改訂の学習指導要領にも見られ、食育は引き続き重視されている⁴⁾。

望ましい食習慣の形成には、幼い時期における正しい食生活の理解や知識の獲得、継続的に繰り返し指導が重要である⁵⁾。また、幼少期の食生活が大人になってからの

食生活に影響を及ぼすことが指摘されている⁶⁾。このことから、小学校段階における食育の指導は、望ましい食習慣を身に付けさせると同時に、今日の社会が抱える食に関する問題の解決に寄与しうると考えられる。

食育については、農林水産省をはじめ、文部科学省や厚生労働省、さらには、環境への配慮や消費者としての視点から環境省や消費者庁などでも行われており、各所で必要性が訴えられている。

本研究ではそのような社会背景を踏まえ、食への感謝の気持ちや生産者の思い、食べ残しについて触れ、授業を構成する。また、題材としては、児童の共通基盤を持たせるために、学校給食を扱うことにした。

さらに、授業プログラム作成者が地域に出てフィールドワークを行い、児童に食事が自らに届くまでに関わる人々の苦労や思いを理解させられるような仕組みを取った。そうすることで、食への感謝の気持ちや生産者の思いを通して、食に関する意識の向上を促進できるのではないかと考えた。(山田風紗)

II 食育に関する先行研究の分析

柳田ら(2007)は、食に関心を持ち、将来にわたり正しい食の判断ができる児童を育成するために食生活実態調査を行った。その結果、朝食やおやつ摂取状況、野菜嫌いな児童の割合において、都心部と郊外部で地域差が見られた。そこで都心部の児童を対象に食育の実践を行った結果、食に関する知識を示し、栽培から調理まで一貫した食育を行うことは偏食を改善する上で効果的であると示唆している。

坂本ら(2012)は、第4学年社会科および総合的な学習の時間における食育として、学校給食の食べ残しに着目した授業実践を行った。社会科を発展させ深める学習を総合的な学習の時間に位置付けて食育を行うことで、社会科学習で芽生えた児童の問題意識から残食を減らすためのキャンペーンへ発展させることができた。これによって、教科や「総合的な学習の時間」が、学校給食を残さず食べる行動形成の一助となる可能性を示唆した。因ら(2015)は、食育指導の充実に焦点を当て、小学校の総合的な学習の時間を軸にした関連指導の検討を行った。「総合的な学習の時間」と「各教科、道徳、特別活動の諸活動」との関連を図った指導計画を作成し、食育指導の充実を試みた結果、児童の食に対する意識を高めるとともに、地域の産業や歴史に対する理解、食に関わる人々の努力や苦労に触れたことで将来の職業観を養う効果が推察できたと述べている。

「食に対する感謝の気持ち」の尺度の信頼性と妥当性を検討した研究として、赤松ら(2009)がある。赤松らは、「食に対する感謝の気持ち」を測定する尺度を作成し、小学5・6年生2,070人を対象に質問紙調査を実施した結果、野菜を「ほとんど毎日食べる」と回答した児童は、「ほとんど食べない」と回答した児童に比べ、「食に対する感謝の気持ち」の得点が高いことが分かった。食に対する感謝の気持ちの尺度を開発し、その信頼性と妥当性を確認することができたことで、これまで、個人の主観による評価しかできなかった食に関する指導に示唆を与えた。

先行研究の分析から、食に対する感謝の気持ちと食べ残しには関係性があることや、食に関心を持たせることで偏食の改善に繋がるなどが明らかになった。一方、「総

総合的な学習の時間」における食育に関する先行研究からは、学校教育における食育が、児童の意識の改善や職業観の形成に役立つという効果があることが明らかになった。本研究では、これらの先行研究の成果をふまえながら、地域の特色の理解や、地域との関わりに対する児童の認識の深まりを重視し、地域との連携を重視した単元開発に取り組んだ。地域学習としても意義を持つ食育プログラムの開発は、社会科の学習と「総合的な学習の時間」の連携の可能性を示唆するものであり、教育課程の見直しにも示唆を与え得るものであると考えられる。(山田風紗)

Ⅲ 小学校における「総合的な学習の時間」のねらいと方法

1 今回の学習指導要領改訂と「総合的な学習の時間」の位置づけ

今回の学習指導要領改訂は、平成28年12月に示された中央教育審議会の答申に基づいてなされた。学習指導要領の『解説』にも書かれているように、今回の答申においては、学校と社会が“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を共有し、連携・協働することが求められており、その結果として、学習指導要領において「社会に開かれた教育課程」の実現が強く目指されるようになった。そのため、各学校には、「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、「子供一人一人の発達をどのように支援するか」、「何が身に付いたか」、「実施するために何が必要か」という6点に渡って教育課程を検討し直す「カリキュラム・マネジメント」が求められるようになった⁷⁾。このような状況の変化をふまえると、これまで以上に、「総合的な学習の時間」の教育課程における役割が重要になったと言えるのではないか。それについては、特に学習する子供にとって下記のような3点の意義があると考えられる。

- ①育成を目指す資質・能力の明確化
- ②学ぶ意義の明確化
- ③学び方の明確化

これまで、学校において、子供は与えられた教育課程の中で、教師から示された内容を学ぶことに集中し、何のために、どのように学ぶかということについて理解する必要はなかった。しかし、先に挙げた6点を検討することは、教師の思いだけに基づいて授業を作るのではなく、学び手の状況をふまえた授業開発につながる。そのためにも先の3点の意義をふまえて、教科と「総合的な学習の時間」を効果的に連携させ、教科の学びを子供の学校外の生活や子供を取り巻く社会に結び付けていく必要がある。教科で身に付けた力を「総合的な学習の時間」で活用することで、育成を目指す資質・能力がどのようなものか、学ぶ意義は何か、そのためにはどのように学ぶべきかといったことを子供自身も認識でき、より主体的自主的に学習にのぞむことができるはずである。

2 「総合的な学習の時間」のねらい

従来から、「総合的な学習の時間」においては、探究的な学習や協働的な学習が求められてきた。特に探究のプロセスについては、「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」という形が示され、このような学習活動を発展的に

繰り返すことが重視されていた⁸⁾。このような考え方は、改訂された学習指導要領にも引き継がれているが、特に課題として、次の2点があげられている⁹⁾。

・「総合的な学習の時間」と各教科等の相互の関わりを意識しながら、学校全体で育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントが行われるようにすること

・探究のプロセスの中でも、従来十分でないと指摘されていた「整理・分析」と「まとめ・表現」に対する取り組みを改善すること

このような課題を克服するために、「総合的な学習の時間」においては、下記のような目標が示された。

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次の通り育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

第一に目標の中で注目されるのは、「探究的な見方・考え方を働かせ」という言葉である。『解説』では、この探究的な見方・考え方には二つの要素があると述べられている。その一つは、「各教科等における見方・考え方を総合的に働かせるということ」であり、二つは「総合的な学習の時間に固有な見方・考え方を働かせること」であり、それは、「特定の教科等の視点だけでは捉えきれない広範な事象を、多様な角度から俯瞰して捉えること」や、「課題の探究を通して自己の生き方を問い続ける」ということである¹⁰⁾。このように見方・考え方が定義されたことの意義は二つある。第一には、教科と「総合的な学習の時間」の学びは連続しているものであることが明確になったことである。第二には、学習の流れとして教科から「総合的な学習の時間」へ発展するという系統性が示されたことである。この目標をふまえて、「総合的な学習の時間」で育成すべき資質・能力が、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」という総則に示された三つの柱に基づいて示されている。(1)は、探究的な学習に関するもので、特に「探究的な学習のよさを理解する」ことが重視されている。(2)は、探究的な学習の過程で発揮される力を示しており、「実社会や実生活」とのつながりを強調している点も注目される。最後の(3)は、社会参画に関わる資質・能力である。主体的・協働的な学習が求められているとともに、それを通して積極的に社会に参画しようとする態度の養成が目標として掲げられている。

以上のように、「総合的な学習の時間」についても目標が構造化され、そこで育成される資質・能力が明確されたことによって、導入当初に比べてその存在感が薄く

なり、やや形骸化されつつあった点が見直され、今後、教科の学習との連携を含め充実が図られることが期待される。

3 「総合的な学習の時間」の方法

「総合的な学習の時間」の方法に関しては、『解説』の第6章から、第9章にかけて様々な視点から論じられている。第6章では年間指導計画及び単元計画の作成について、第7章では学習指導について論じている。第8章は評価、そして、第9章は充実のための体制づくりと、他の教科よりも充実した方法についての解説が示されている。本節でそのすべてを論じることはできないので、本研究の内容に最も関連が強い外部との連携について論じていく。

第9章の第5節で述べられている外部との連携の構築は、具体的に外部のどのような人材や組織とつながるかということだけではなく、留意点等が示されている。外部人材等として具体的に例示されているものは、保護者や地域の人々から企業や特定非営利活動法人等の関係者に至るまで様々である。このような外部との連携の構築に欠かせないことは、連携が学校の側だけではなく双方にとって利益があるものとなることである。その点について、『解説』においても、「学校と地域との互恵性が生まれ、息長く継続的な外部連携を実現」することが重要であるとして、具体的な事例をあげている¹¹⁾。その事例とは、町づくりや地域活性化、地域の伝統や文化の保護・継承、地域の商店街の再生、安全な町づくりや防災などである。

外部連携のための留意点としては、以下の5点があげられている¹²⁾。

- (1) 日常的な関わり
- (2) 担当者や組織の設置
- (3) 教育資源のリスト
- (4) 適切な打合せの実施
- (5) 学習成果の発信

(1)は、日頃から学校が地域の活動に積極的に関わることで、協力的なシステムを構築することを意味している。(2)は、このような連携が特定の教師と地域の特定の個人のパーソナルな関係を基盤に構築される傾向があることを踏まえて指摘されたことである。そのような個人と個人の関係に基づく連携は、その人が異動等でいなくなると終わりがちである。そうならないためには、組織として明確に連携を担当する役割を位置付けておく必要がある。(3)は、リストを作ることで、いつでも、誰でも、この連携を授業開発に活かすことができるようになるということを指摘している。(4)は、いわゆる外部に「丸投げ」という状況を作らないということの意味している。最後の(5)は、成果を学校と地域が共有できることの重要性を意味している。それによって、連携が一層強固なものとなるのである。

以上、『解説』に示された「総合的な学習の時間」の、方法について、特に外部との連携の構築に焦点をあてて検討をした。このような学習指導要領の趣旨をふまえながら、本研究においては食育に関わる「総合的な学習の時間」の授業開発を、地域と連携にしながら行った。(桑原敏典)

Ⅳ 地域におけるフィールドワークを中心とする教材研究

食を通じて地域等を理解することや、食文化の継承を図ること、自然の恵みや勤労の大切さを理解することは、重要であると考えられている¹³⁾。

そこで本研究では、地域性とその地域のもつ自然の恵み、作り手の思いをよりよく理解させるために、フィールドワークを実施した上で授業プログラムの開発を行うこととした。

本研究でフィールドワーク調査を行った岡山県内の〇地域は、山間部に位置し、多くの山々に囲まれている。特徴としては、綺麗な水に恵まれている点が挙げられ、数多くの農作物が栽培されている。

〇地域におけるフィールドワークは、(1)市役所農林課、(2)教育委員会、(3)栄養教諭、(4)A農家、(5)B農家に対して、それぞれ対面でのヒアリング調査を実施した。

(1)市役所農林課

〇地域管内のN市農林課では、〇地域における農業の現状と特産物の特徴、出前授業の有無に関してヒアリングを行った。

〇地域は、先に述べた様に山間部に位置し、多くの山々に囲まれ綺麗な水に恵まれているのが特徴である。〇地域では農家ごとに、米や小松菜、きゅうり、トマト、ぶどうなど数多くの農作物が栽培されている。その中でも、田んぼや棚田が多く米の栽培が最も盛んであることが分かった。

農林課では、子牛の飼育体験を希望した学校を対象に実施していることが分かった。また、体験期間の前に出前授業を行い、飼育する子牛の特徴や成長すると食用の牛肉になることなどを子どもたちに伝えている。しかし、学校の負担が大きい事業でもあるため、近年は飼育体験を希望する学校は少なくなりつつあると話されていた。

さらに農林課の方には、ヒアリングを行っている理由を説明し、農家さんを紹介いただきたい旨を話した所、後日、〇地域内在住のB農家を紹介して頂いた。B農家のヒアリング内容については、(5)で扱う。

(2)教育委員会

〇地域管内のN市教育委員会では、学校における食育の取り組みなどについてヒアリングを行った。食育の取り組みは、給食指導や農業体験に力を入れるなど学校や栄養教諭によって異なり、多様であることが分かった。そこで教育委員会の方には、〇地域の栄養教諭の方を紹介して頂き、〇地域の状況について栄養教諭の方に聞くこととなった。栄養教諭のヒアリング内容については、(3)で扱う。

(3)栄養教諭

栄養教諭の方には、〇地域内の小中学校における食育の取り組みや課題に関してヒアリングを行った。

基本的に、1年に1度は各学年で授業を行うよう計画しているとのことだった。また、出前授業だけでなく、給食時間中の指導にも力を入れたいと考えているが、日々の調理業務と重なるため上手くいかないことが多く、試行錯誤を繰り返していることが分かった。

普段の学校給食の献立については、決められたメニューの中から洋食・和食など

バランスの良い献立の作成を心がけているとのことである。学校給食の残食量については、小学校は比較的少ないが、中学校になると増加傾向にあると話されていた。残食量は共通して野菜が多く、課題となっているとした上で、食べ残しは、小学校という早い段階で好き嫌いを減らし、残さずしっかり食べることを習慣付けることが重要になると話されていた。

栄養教諭の方には、学校給食で扱われる農作物を育てられている、O地域内のA農家を紹介して頂いた。A農家のヒアリング内容については、(4)で扱う。

(4)A農家

A農家は、10年以上前からO地域内の小中学校へ学校給食で使用するぶどうの提供をしている。ぶどうの栽培をする中での苦労やどのような思いで栽培を行っているのかについてヒアリングを行った。

A農家は、夫婦2人でぶどう農園を運営している。先代の頃からO地域の小中学校の学校給食にぶどうを提供しており、A農家夫婦の子どもが幼い頃は、給食で提供されたぶどうについて、子どもを介して「ぶどうがおいしかった」という感想をよく耳にしていたと話していた。しかし、現在では、学校に通う小中学生との繋がりではなく、給食で提供されたぶどうの感想を聞く機会はなくなったと話していた。

ぶどう栽培の中で最も苦労する作業は、「間引き」というその年、ぶどうの実を付けさせる芽を選定する作業である。また、その間引きは、ぶどう作りの中で、最も重要な作業であるため、集中力を要し、神経を使うが、選定した芽の全てに、質の良い実がなるとは限らず難しい作業であると語っていた。また、ぶどうは栽培者の身長に合わせて木の高さを調節するのが一般的であるが、現在栽培している木は、先代から引き継いだものであり、身長の低い者にとっては、ちょっとした作業でも大変であると話していた。

ぶどうの出荷時期になると収穫から梱包、発送まで2人で全て行っているため朝から夜中まで作業が終わらない日が続くこともある。旬の時期はぶどうの成長が止まらないため、時間との勝負であると話していた。

ぶどう栽培は、手間もかかり苦労も多いが農園のぶどうを食べた消費者から「今年もぶどうはおいしかった」「また、来年も楽しみにしている」といった言葉を糧に体が動くうちは頑張っ続けていきたいと話していた。また、近年の食生活の話になると「野菜を食べる人が減ってきていることが悲しい。孫たちが遊びに来るとおいしいと言って沢山食べているが、普段の生活ではあまり食べていないみたいだ。」といった現代社会の諸課題に繋がる話も聞くことができた。

(5)B農家

B農家は、O地域の中で最も野菜の栽培を行っている農家である。野菜やぶどうの栽培をする中での苦労やどのような思いで栽培を行っているのかについてヒアリングを行った。

B農家では、夫婦2人でトマトを主軸にぶどう・小松菜など多くの農作物を栽培している。日頃の作業では、「夫婦2人にあったペースで農業をすること」を大切にしている。しかし、トマトの収穫とぶどうの収穫が重なる時期は、成長が止まらないため両方同時に面倒を見るのが一番大変であると話していた。また、トマトの

栽培に一区切りがつくと、土を耕し直して小松菜の栽培を行う。この畑の切り替えの作業は、1ハウスごとに約1週間の時間がかかるようで、作業が終わったハウスから小松菜を植えていく。しかし、ハウスの作業をしている時に小松菜の収穫が重なることもあるようで大変だと話していた。

自身の育てた野菜を消費者が口にするときには、「野菜本来の味を大切にしておいしく食べてほしい。しかし、近年は食生活も変化の影響もあるのか野菜を食べる子どもが減ってきていると感じている。それも仕方のないことだと思う」と話されていた。

上記(1)～(5)のヒアリングを実施して明らかになったことは、幼い段階から食育に関する取り組みをすることが重要であるということである。A、B農家のヒアリング調査からは、近年は食文化の変化から野菜を食べない子どもの増加、栄養バランスの偏った食生活など、食に関わる多くの課題を問題視していることが伺えた¹⁴⁾。

さらに、栄養教諭へのヒアリングでは、学校では残さず食べていても家庭などでは偏食や食べ残しをするなど栄養バランスの偏った食生活となっていることが分かった¹⁵⁾。

以上のことから、主に2つの要素を取り入れる必要があると考えた。第一は、普段の生活の中で関わる機会の少ない地元農家の人々の思いを伝えることである。O地域では、どのような種類の農作物が栽培されているのか。また、その農作物をどのような思いで育て、消費者にどのように食べてほしいと思っているのかといった農家と子どもたちとの繋がりを取り入れることが重要である。

第二は、日常生活の中で自分たちに取り組めることを考えさせることである。農家の思いに触れることで食への感謝の気持ちや食べ物を残すことの「もったいなさ」について理解させる。それらを踏まえ、子ども自身が自らの食生活を見直し、これからの生活で自分たちに何ができるのかを考えさせたい。

以上の2点が、地域社会と連携した食育授業プログラムを開発する上で取り入れるべき重要な要素であると考えた。(山田真珠)

V 食育プログラムの開発

1 食育プログラムのねらい

本授業プログラムは、フィールドワークを用いた教材研究の成果を取り入れて開発した。子どもたちにO地域の良さや農作物の特徴、農家など食に携わる人々の苦労や思いなどを理解させるため、ヒアリングした内容を取り入れた。また、そのような理解に基づいて、日常生活の中で子ども自身が行うことできる食に関する取り組みはないかを考えさせた。子どもが自ら設定した課題を通して、食への向き合い方や食についての考え方を身に付けさせることを目的とした。

本授業のねらいは、主に2点である。第一は、自身の住む地域の農家の人々がどのような思いで農作物を育てているか、そして、その農産物が自分たちのもとに食事として届くまでに、どのような機関や人々が関わっているのかを理解させることである。

第二は、現代社会の抱える食に関する課題に対して、これからの生活の中で自分

たちにできる取り組みは何かについて考えることのできる力を養うことである。

2 食育プログラムの展開

本授業（全1時間）の展開は、大きく分けて三部構成である。パート1は、フィールドワーク調査で行ったヒアリングの内容をもとに、農家の人々が普段どのような苦労や思いで農作物を育てているのか写真などを使って視覚的に説明する。また、様々な思いで生産者が育てた農作物は、地域のスーパーなどに出荷され、家庭や給食センターが購入し、調理されて食事や給食になる。このように沢山の人の「思いや協力のリレー」で自分たちのもとに食事が届いているということを理解させる。

パート2では、食品ロスの原因の1つである「食べ残し」を主に取り上げた。その理由としては、食品ロスの他の原因である、「買いすぎ」や「皮の剥きすぎ」は小学生には理解しがたい内容であると考えたためである。また、社会の諸問題を考えるきっかけとしても、当事者意識を持ちやすいよう「食べ残し」に着目することとした。

内容としては、いくつかの食べ残し写真を提示し、食べ残しのパターンについてシミュレーションさせ、考えながら食べ残しを学べるように構成した。

そしてパート3では、パート1とパート2の学びを通して、今後、家庭での食事や学校給食で食べ残しを減らすために自分に何ができるのか考えさせ、作戦をワークシートに記入させるように構成した。ワークシートには、一人一人が考案した作戦の作戦名と具体的な内容を書かせ、後方には、作戦に取り組んでみての感想を記入する欄を設けた。このようにすることで、本授業プログラムの実施日だけでなく、継続的に食べ残しについて考えていけるような仕組みを盛り込んだ。（山田真珠）

【資料】小学校「総合的な学習の時間」における
地域との連携に基づく食育プログラムの教授書

過程	教師の指示・発問	教授学習過程	予想される児童の発言	資料
導入	・ご当地キャラクターのモチーフとなっているものは何か知っているか。	T：発問する P：答える	・牛 ・ぶどう	資料①
展開	・ご当地キャラクターのモチーフにもなっているぶどうが秋ごろに給食ででたことを覚えているか。	T：発問する P：答える	・覚えている ・覚えていない	資料②
	・給食ででたぶどうは、どこで育てられたものか予想してみよう。	T：発問する P：予想する	・O地域 ・N市 ・わからない	
	・給食ででたぶどうは、O地域で育てられたものである。	T：説明する		
	・O地域のぶどう農家さんには、どんな苦労や思いがあるのかを予想してみよう。	T：発問する P：予想する	・1年を通してぶどうのお世話をするのは大変だと思う。 ・育てたぶどうをおいしく食べて欲しい。	
・ぶどう農家さんの苦労について確認する。	T：説明する		資料③	
・ぶどう農家さんの他に同じような思いを持っている人はいないだろうか。	T：発問する P：予想する	・野菜農家さん		
・O地域の野菜農家さんには、どんな苦労や思いがあるのかを予想してみよう。	T：発問する P：予想する	・沢山の野菜を育てることが大変。 ・野菜のお世話をするのが大変。		

	<p>・野菜農家さんの苦労について確認する。</p> <p>・先月、クラスで子牛の飼育体験を行ったが、子牛たちは大きくなったらどうなるのか。</p> <p>・自分たちが育てた子牛が誰かに食べられるときにどんな風に食べて欲しいか。</p> <p>・食事は、沢山の人の「思いや協力のリレー」で自分たちのもとに届くということを確認する。</p> <p>・資料⑤は、どんな状態の写真であるか。</p> <p>○食べ残しが起きてしまう原因には、何があるのかを予想してみよう。</p> <p>・予想した原因以外に資料⑥の様な場合に考えられる原因を予想してみよう。</p> <p>○食べ残しを減らすために自分たちに何ができるのかを話し合う。</p> <p>(1)これまでの自分</p>	<p>T：説明する</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：説明する</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：予想する</p> <p>T：発問する P：予想する</p> <p>T：発問する P：考える</p>	<p>・育てた野菜をおいしく食べて欲しい。</p> <p>・食用のお肉になる。</p> <p>・食べられてしまうのが悲しい。</p> <p>・おいしく食べて欲しい。</p> <p>・残さず食べて欲しい。</p> <p>・食べ残し。</p> <p>・好き嫌い。</p> <p>・お腹がいっぱいだった。</p> <p>・ご飯を食べる前にお菓子を食べていた。</p> <p>・量が多かった。</p> <p>・食べる習慣がない。</p> <p>・わからない。</p> <p>(1)</p>	<p>資料④</p> <p>資料⑤</p> <p>資料⑥</p>
--	---	---	--	----------------------------------

	<p>の食事を振り返える。</p> <p>(2)クラスの食べ残しを減らすために自分たちが取り組める事を考える。 →準備時，給食の時間</p> <p>(3)1，2を踏まえて自分ができる食べ残し作戦を考える。</p> <p>・食に関わる問題を確認する。 食べられるのに残す，捨てる，無駄にしまうことを「食品ロス」という。 食品ロスは，国内外問わず社会全体な問題であり，食品ロスを減らすためには，一人ひとりができる事をしていく必要がある</p>	<p>T：説明する</p> <p>T：発問する P：発表する</p>	<p>・残さず食べている。 ・少しだけ残してしまっている。</p> <p>(2)</p> <p>・準備は早くする。 ・みんなで協力する。 ・食べている時は静かに食べる。 ・お互いに声掛けをする。</p> <p>(3)</p> <p>・嫌いなものも少しは食べる。 ・ご飯の前には，おやつを食べない。 ・時間をかけてゆっくり食べる。</p> <p>・農家さんなど沢山の思いがこもっている食事を残さず食べる事が大切だと思った。 ・食べ残しを減らすために自分たちにできることをこれからの生活の中で実際に行ってみたいと思う。</p>	
<p>まとめ</p>	<p>○本時で学んだこと，考えたことをまとめる。</p> <p>・本時で学んだこと，考えたことをプリントにまとめ，発表しよう。</p>			

資料

- ①N市ご当地キャラクターの写真，②A農家で育てているぶどうの木の写真，③B農家で育てている野菜の写真，④飼育した子牛の写真，⑤食べ残しの食卓の写真，⑥お刺身の大根など付け合わせの食べ残し写真

(山田風紗・山田真珠作成)

VI おわりに

本研究の成果としては、次の二点が挙げられる。第一は、フィールドワークを行ったことで、児童が日常生活の中で関わりの少ない農家の苦労や思いを具体的に示すことができた点である。また、授業プログラムをO地域外の人間が作成したことで、フィールドワークを通して、住民とは違う視点から地域を捉え、授業に反映されることができた。

第二は、これまでの児童自身の食生活をもとに見直しと改善策の検討を授業に取り入れた点である。また、実施にあたって学校給食を題材に扱うことで児童全員に共通の基盤を持たせることができた。

以上二点により、本研究は、地域社会と連携した食育授業プログラムの一例として、総合的な学習の時間における食育の展開に新たな示唆を与えることができたと考えている。

今後の課題としては、本研究では農家の思いを児童に伝える際、農家から児童への一方通行の展開となってしまう、農家と児童が互いにコミュニケーションをとることができなかつた点を挙げるができる。授業の際にゲストティーチャーとして地域の方を教室に呼び、双方向の対話ができるようするとともに、教室を開かれた環境にし、地域社会に近づけるような取り組みを今後は構想していきたい。

(本研究は、岡山県「平成30年度地域を学んでのこさずたべよう事業」の支援を受けて取り組んだものである)

(本稿は、第I章及び第II章を山田風紗が、第III章を桑原敏典が、第IV章、第V章、第VI章を山田真珠が執筆し、教授書開発を山田風紗と山田真珠が担当した。そして、最終的には、3名で全体の調整を行った)

【註】

- 1) 文部科学省『食に関する指導の手引き—第一次改訂版—』，2010年。
- 2) 杉浦令子，坂本元子，村田光範「幼児期の生活習慣病リスクに関する研究」日本栄養改善学会『栄養学雑誌』65，2007年，pp. 67-73。
- 3) 「食育基本法」。
- 4) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』東洋館出版社，2018年。
- 5) 赤松利恵，永橋久文「行動変容段階モデルを用いた小学校における食に関する指導の実践事例」『日本健康教育学会誌』16(2)，2008年，pp. 31-40。
- 6) 石井雅幸，上島理歩「子ども時代の孤食が大人になっての食への意識にどのように影響するのか」『大妻女子大学家政系研究紀要』53，2017年，pp. 61-79。

- 7) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版社，2018年，p. 2.
- 8) 同上，p. 5.
- 9) 同上，p. 6.
- 10) 同上，p. 10.
- 11) 同上，p. 144.
- 12) 同上，pp. 145-146.
- 13) 文部科学省『食に関する指導の手引き—第一次改訂版—』，2010年.
- 14) 独立行政法人日本スポーツ振興センター「平成22年度児童生徒の食生活実施調査【食生活実施調査編】」，p. 286, からも野菜嫌いの子どもの多いことは明らかである。
- 15) 独立行政法人日本スポーツ振興センター「平成22年度児童生徒の食生活実施調査【食生活実施調査編】」，p. 322, からも嫌いなものがある時，学校では食べるが家では食べない子どもが一定数いることが明らかである。

【参考・引用文献】

- ・柳田多寿, 大森玲子「児童の食生活実施調査と食育の実践」宇都宮大学教育学部『教育実践総合センター紀要』30, 2007年, pp. 351-360.
- ・坂本達昭, 萩真季, 鉄谷佳代, 春木敏「4 学年社会科および総合的な学習の時間における食に関する指導-学校給食の食べ残しに着目した授業実践-」『日本健康教育学会誌』20, 2012年, pp. 119-130.
- ・因雅仁, 藤川聡, 水上丈実「総合的な学習の時間を軸とした関連指導の検討-食育指導の充実に焦点をあてて-」『北海道教育大学紀要教育科学編』65, 2015年, pp. 411-417.
- ・赤松利恵, 井土ひろみ「児童を対象とした「食に対する感謝の気持ち」尺度の信頼性と妥当性の検討」『日本健康教育学会誌』17, 2009年, pp. 147-159.
- ・本田藍, 甲斐結子, 秋永優子, 保坂稔, 中村修「小中学生の生活習慣病予防に関連する食行動と食に対する意識, 知識, 調理技術等との関連」『日本食生活学会誌』22, 2011年, pp. 28-34.
- ・農林水産省「平成30年版『食育白書』」日経印刷, 2018年.

Developing a food education program focusing on cooperation with a local community

On the basis of making a lesson plan for the integrated learning of an elementary school

Nagisa YAMADA*1, Shinju YAMADA*1, Toshinori KUWABARA*2

Keywords: elementary school, integrated learning, food education, fieldwork, local community

*1 Graduate School of Education, Okayama University (Master's Course)

*2 Graduate School of Education of Okayama University
